

歴史館まなび隊

1

縄文のムラ

ここでは、いまから約6000年前の縄文前期、八ヶ岳のふもとにあったムラのようなすを再現しています。森を丸く切り開いて、立石・列石(りっせき・れっせき - 実物の60%の大きさですから、実際は2倍くらいの大きさと考えてください。)を中心に半地下式の竪穴住居(たてあなじゅうきょ)や床を高くした建物(実物の70%大)、集石(実物の60%大)など配した風景が広がっています。

背景の八ヶ岳の山頂部はすでに新雪が積もり、その下は緑の針葉樹(しんようじゅ)、さらに下ると紅葉した広葉樹(こうようじゅ)を見ることができます。収穫の秋、縄文人が集まって秋の盛大な祭りが終わって、しばらくした静かな秋の夕暮れです。

当時の人びとは、地面を掘りくぼめて床をつくり、床に穴を掘って柱を建て、その上の屋根をカヤなどの植物を材料に葺(ふ)いた竪穴住居で暮らしていました。展示室の竪穴住居は、諏訪郡原村阿久(あきゅう)遺跡の発掘調査をもとに復元したもので、家の柱などの建築材にはクリ、ミズナラなどの広葉樹が使われています。

この家の家族は夫婦と小さい子ども二人の四人です。父親と息子は八ヶ岳(やつがたけ)の山麓(さんろく)にシカ猟(りょう)にでかけました。たぶん仕とめたシカをかついで家路を急いでいるのでしょう。母親と娘も近くの小川に洗い物と水汲みに出かけているので、今この家は留守なのです。





竪穴住居の内

豊かな山の幸

約 6000 年前の縄文時代前期には、現在と同じような樹木が育っていました。東日本でどんぐりやヤマクリなど、実をつける木々の森（落葉広葉樹林 らくようこうようじゅりん）が広がっていました。

木の実やきのこ、ヤマノイモなど植物の食料採取を中心にして、秋にはサケ漁、冬には鳥や獣（けもの）の狩猟などをして暮らしていました。

竪穴住居の内には、クマ、シカ、カモシカの毛皮が敷かれています。炉の中には火にかけた土器の中でやまくりがゆられています。夕食の準備をしているのでしょうか。炉の脇の浅い鉢にはどんぐり団子にイノシシの肉やゼンマイ・ミツバナなどの煮物（にもの）が盛られています。

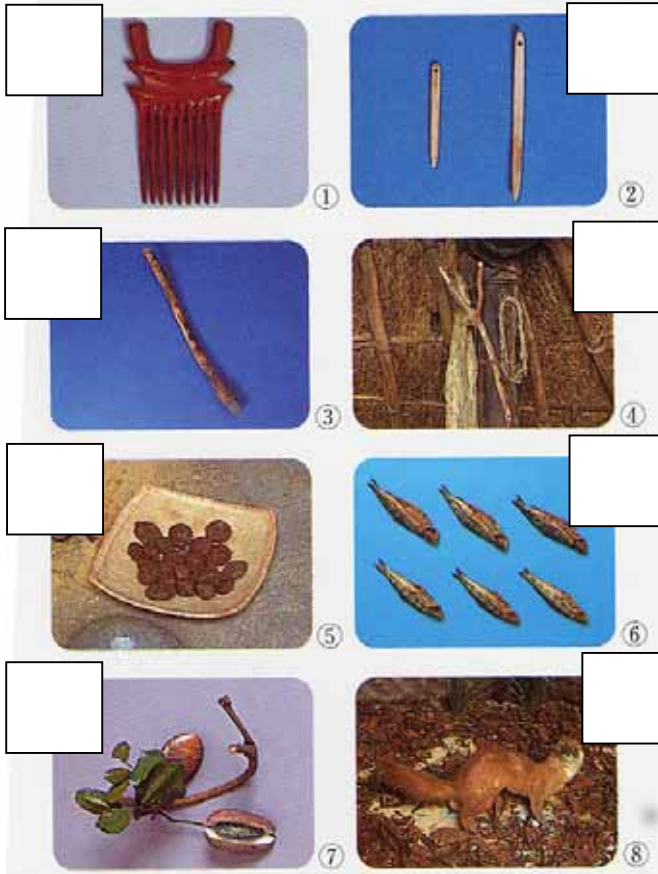
炉の周りには、どんぐりなどを割る台石とたたき石、それらを粉にする石皿とすり石などがあります。炉の上の火棚（ひだな）にはへびの干物（ひもの）もあります。

柱周辺には、狩に使う弓と矢、シカの角で作った釣り針、天蚕（てんさん）の糸から造った釣り糸のついた釣竿（つりざお）、木を切るときに使う磨製石斧（ませいせきふ）、家の修繕などに使うフジ、アケビ、ヤマブドウのつるやそれらで造られた籠（かご）などの日常生活の道具があります。

屋根を支える梁（はり）にはノウサギやキジがつるされています。さまざまな食料や道具から、縄文人の豊かな生活を実感できます。

探してみよう!?

左の写真 ~ は室内にある道具のほかに、住居のまわりで見つけることができる動物や木の実です。どこにあるのか探してみませんか。



ここにあった!
をチェック!!

ほかにもイロイロあるから、お気に入りを見つけてみよう。

写真の名称（ から順に）

うるし塗りのくし ヘアピン

柄についた打製石斧（土堀具）

叉木（またぎ） どんぐり団子

くん製されたイワナとヤマメ